



高さ水量ともに日本一の那智の滝と熊野那智大社 Sep.2.2015

ココロにサプリ

広報メディア研究所代表 上野 弘子

第115回

雨の熊野古道



ポツリ。
額に落ちてきた一滴は、間もなく本降りとなり、巡礼の道を行く私達の体を容赦なく打つ。
予報通りの雨。しかし、警報が出ない

限り予定は変わらない。

リュックを地面に置き、持参した登山用のレインコートを用意する。リュックにもレインカバーをかぶせ、頭にはフードをかぶり、再び歩き始めた。春から始めた熊野古道を歩く旅。

昨日は炎天下、JR那智駅から大門坂を経て聖地・那智山を訪ねた。

大門坂は、熊野古道の中でも当時の面影を最も美しく残していると言われている。樹齢千年近い杉木立の中は昼なお薄暗く、ひんやりとした空気に包まれていた。標高500メートルに建つ熊野那智大社へと続く、苔むした大きな石段。平安の昔、高貴な人々は、この坂を籠に揺られて登ったと聞く。永遠に続くかと思われるような長く急な石段を、私はストックで体を支えながらゆっくりと登る。登りきった先には、まるでご褒美のように紀伊山地の絶景が広がっていた。

熊野那智大社は、熊野本宮大社・熊野速玉大社とともに熊野三山と呼ばれている。境内には、神武天皇東征の道案内を

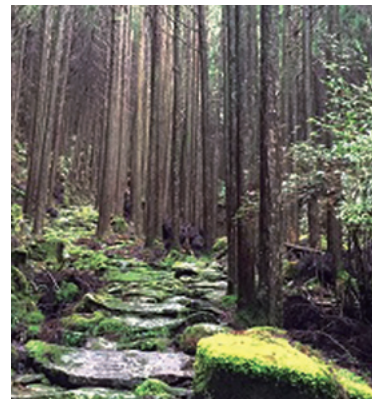
その夜は勝浦温泉で体を休め、二日目は早朝、熊野那智大社から出発だ。

「雲の中を行くがごとし」の意を込め、大雲取・小雲取と名付けられた峠は、熊野古道の中でも最難関と言われる場所。那智・妙法の急峻な山道をガイドとともに我慢強く登る。雨に洗われ一層濃くなった緑の中を、両手にストックを握りながら歩を進めるが、息があがり、数十分おきに休憩が必要だ。

雨は何時間も降り続き、小降りになると行く手に白い霧が現れる。霧は向かいの尾根へと流れ、水墨画のような光景を生み出す。幻想的でただただ美しい。

しかし、見とれてばかりはいられない。山道に降り注ぐ雨はやがて沢をつくり、急な流れに足が取られる。苔むした岩はより滑りやすくなり、慎重に歩を進めなければ危険だ。

昼食時の30分だけ小屋で腰を下ろし、後はひたすら雨の中を進む。汗びっしょりになりながら、いくつもの峠を越えると、終点の小口まではひたすら下りが続



雨に洗われ苔が光る熊野古道 Sep.3.2015

した八咫鳥が石に姿を変えたという烏石の他、白河上皇が植えた枝垂れ桜や平重盛が植えた楠の木が茂り、古来より多くの人々の信仰を集めてきたことを静かに物語っていた。

隣接する那智山青岸渡寺からは、那智の滝へとひたすら下り道だ。

那智山の原生林を貫き、白く輝きながら落ちてくる大滝には神聖さが漂い、観る者を圧倒するような力が漲っていた。

目を凝らし、体を斜めにし、石段を避け、土や草の部分を選びながら行く。ガイドから渡された細い縄をトレッキンググシューズに巻きつけて滑り止めにしたが、二度ほど尻もちをついてしまった。

ひざ関節に痛みを感じ、そろそろギブアップしたくなった頃、ようやく終点地に。8時間半のトレッキングが終了した。ツアー参加者は18人。リタイアする人はいなかったが、先頭集団の私たちと最後尾の人との到着時間には30分以上の差があった。その差は装備の違いだとすぐにわかった。最後尾の数は、山歩き用のレインコートもなく、ジーンズや綿のパンツにスニーカーといった軽装。ケガもなくこの悪天候の中、完歩できたことが奇跡のようだった。

山を侮ってはいけない。たとえツアーであっても、自らの身は自らが守らなければならぬ。事前に天候をチェックし、最悪の場合を想定して準備する。

これは、山に限らず、すべての減災、防災につながるのではないだろうか。